

善知鳥伝承考（下）

— 追尋、そして放擲 —

五 文学から博物学へ

受け継がれる伝統

時代は移り、江戸に幕府が開かれてのちも、うとうやうかたを語る文芸の伝統はなおも継続した。

語り物文芸としての説経（説経節あるいは説経浄瑠璃とも呼ばれる）の発生は室町時代以前にさかのぼるが、興行がさかんになるのは江戸初期からとされる。⁽¹⁾『さんせう太夫』の正本すなわち上演台本は寛永末年（一六四四）頃の刊本がもともとも古い。人買いに取られ、安寿とつし王丸を乗せた舟は母御の舟から次第に遠ざかってゆく。「今朝越後の国直江の浦に立つ白波が、横障の雲と隔てられ、我が子見ぬかな悲しやな。善知鳥安方の鳥だにも、子をば悲しむ習あり」とある。⁽²⁾いくら子どもたちの名を呼んでも、もう声は届かない。

そのころの説経者は、社寺の門前や境内など人通りの多いところで簾を擦りながら語って歩いた。⁽³⁾このときすでに庶民のあいだにも、うとう説話は知られていたにちがいない。これは浄瑠璃にも登場する。

菊地章太

正徳二年（一七一二）に初演された近松門左衛門の世話物『夕霧阿波鳴渡』に親子鳥の名が語られている。遊女夕霧の子は他人の手で育てられていた。生きているうちに、わが子にひとめ会いたい。蒲団に伏してしゃくりあげながら、「うたふ声にも血の涙。子は安方のさえずりや」と歌う夕霧であった。⁽⁴⁾

古浄瑠璃の時代を経たのち、人形浄瑠璃が空前の盛況をむかえる頃、親子鳥の物語は世間であまねく知られていたのだろう。あるいはまた、こうした都市の芸能を通じて、うとう説話が民間に浸透したと言えるかもしれない。戯作者物語で名高い仮名草子『竹斎』にもそれがうかがえる。北野天満宮に詣でる群衆のあいだで囃子の音もかまびすしい。やがて「例の御好きの善知鳥をば、一番こそは舞はれける」とつづくほどの知名度だった。⁽⁵⁾

歌枕の伝統もまた近世において健在だった。井原西鶴の『一目玉鉦』に記事がある。蝦夷千島にはじまり壱岐対馬に至る名所歌づくしの書で、元禄二年（一六八九）に刊行された。浮世草子の大家は、もと矢数俳諧の師匠として知られた。ここでは津軽の名物として「うと

う やすかた」をあげ、外の浜について「此所今に殺生人獵師の世をわたる業とて、幽に住あれて、物淋しき浦也」と記す。これは伝聞だろう。ついで古歌三首をあげている。すなわち、「紅^{くれな}みの涙の雨にぬれし^と逆簀^とを着て取^とうとふやすかた」「陸奥の外の浜なるうとふ鳥子はやすかたの音をのみそ鳴^ぞ」「子を思ふ涙の雨のみの^簀の上にかるもつらしやすかたの鳥」とある。いづれも古来あまたの書物に伝えられてきたものばかりである。

津軽藩の史書『津軽一統志』に記事がある。津軽家代々の事跡を記した官撰の書で、享保十六年（一七三一）に刊行された。首巻に領内の名所古跡を列挙している。すなわち、「十府菅薦 野田ノ玉川 外ノ浜 有多宇末井梯 鳥頭安渴 津軽野」とある。⁽⁷⁾ 有多宇末井梯は『吾妻鏡』に記された天下の險阻である。頼朝派遣の軍勢と奥州藤原氏の残党とのあいだで文治五年（一一八九）二月から翌年三月にかけて争乱があつた。大川兼任に率いられた残党は北上川を越え、外の浜と糠部の間にある交通の難所「有多宇末井之梯」に立て籠もつたという。⁽⁸⁾ ここが最後の戦場となり、奥州合戦は終結に向かう。鎌倉幕府がはじまる時代のことだった（有多宇末井之梯のことは次章でも取りあげたい）。

『津軽一統志』首巻はつづけて、名所古跡各項の紹介のところで、鳥頭安渴にちなむ古歌四首をあげている。謡曲『善知鳥』に登場する「陸奥の外の浜なる呼子鳥鳴くなる声はうたふやすかた」ならびに西

鶴のあげた三首である。⁽⁹⁾ ここでは、官撰史書が藩主による津軽統一という偉業を述べるに先立って、歌枕や古来の名どころの紹介からはじめていることに注目したい。⁽¹⁰⁾ うとうの名は全国に知られており、藩にとつて誇るべき資源だったにちがいない。

海鳥の生態観察

本来は文芸世界の伝承であつたものが、歌や説話の普及と連動するかのようになり、やがて具体的な鳥そのもののへの関心が高まっていく。早くは徳川初期の年代記『当代記』に記事がある。同書は家康の外孫松平忠明の撰述とされるが、成立時期は知られない。慶長十二年（一六〇七）六月の条に、宇都宮藩主奥平家綱が父信昌に善知鳥を献上したとある。謡曲で名高い鳥を一見したいとの要望に応え、松前から塩濱けにして送らせたという。頭は「猪のしかりけ」のごとく、足は水鳥のごとくである。大きさは「あちと云水鳥のちと長き」ほどで、子を「平砂に生捨ける」習性がある。四月から七月までかの地に棲息するという。⁽¹¹⁾ うとうはかつて津軽や下北に飛来していたが、いつしか繁殖地を北方に移動させた。のちには蝦夷地の鳥々まで人を遣わして捕獲するようになる。

俳人其角の文集『類柑子』に記事がある。同書は宝永四年（一七〇七）其角没後の刊行である。松前へ渡った商人の見聞を書きとめている。いわく、鳥々の獵師は「鳩吹手合」^{はとふきてあわせ}の要領で鳴き声をま

ねて鳥を打つ。うとうと呼ぶのは「打追の心成べし」という。「うちおう」がつづまって「うとう」になったというのである。ひとつの語源説である。さらに「はやし立る列士せこのものをやすかたといふ也」とある。打ち追う方かた、はやす方かたをふた手に分けて、後者をやすかたと呼んだという。つづけていわく、「ゑびす共笠ともにかくれ、簑にふす有さま、やすからぬ」とある。これは謡曲の一場面を思わせる情景だが、ゑびすとは「卒土の浜、東夷をさす也」としている。⁽¹²⁾卒土の浜は外の浜、その土地の者を古来の呼称にしたがって東夷と呼んだ。鳥の生態についての関心のみならず、語源探求もまた近世における顕著な動向と言つてよい。

仙台藩の地誌『奥羽観迹聞老志』に記事がある。同書は享保四年(一七一九)に完成した。うとうについて、「相伝ふ」として、もとは外の浜の産と記している。もはやそこには棲息していなかったのだらう。春から夏にかけて商人が売りにくるといふ。子臈コガモに似て色は薄黒く、くちばしは黄色く、顎の下から腹まで真っ白である。商人が言うには、脂がのつて美味であり、その味は鴨に劣らない。「脾胃を養ふに足る」ゆえに、これを捕らえる者が跡を絶たないといふ。⁽¹³⁾うとうも美食家の餌食にされてしまったのだ。

故実の大家伊勢貞丈の『安斎随筆』に記事がある。同書は天明四年(一七八四)没後の遺稿集である。謡曲の説話と歌を載せたあと、『謡曲拾葉抄』の記事を引いてこれを批判した。「うたふは雁の事なり」

というが、それは誤りだという。『謡曲拾葉抄』に「或説云」として、「うたふとは鳥の名に非ず雁の子を親の呼声を云也」と記していた。さらに「或書云」として、鳥の姿かたちは「方目ハンに似たり。喙ハシアンも方目に似て頭は臈のごとし。嘴の上に肉角あり赤色也」と記していた。⁽¹⁴⁾これについて貞丈いわく、うとうを「ほしからほし」にしたものを見たところ、毛は薄黒く、くちばしは乾いて色がさめてしまったが、「肉角にあらずかたし」という。⁽¹⁵⁾

鳥の生態が明らかになるにつれ、身体的な特徴のひとつとして、くちばしの上に突起があることが知られてきた。このことは天明元年(一七八一)の自序を有する松前広長撰『松前志』にも言及がある。著者は松前藩主の家系につらなり、現地での見聞に徹した地誌である。うとうは蝦夷地では「ツナキトリ」または「ハナトリ」と呼ばれ、海中にもぐつて魚を捕らえ、くちばしの上の鼻のあたりに獲物を「ひっかけつなぎ出て」これを食する。それが名の由来だといふ。⁽¹⁶⁾

古川古松軒の『東遊雜記』に記事がある。同書は古松軒が天明八年(一七八八)幕府巡見使に随行し、奥羽および蝦夷地を視察したおりの記録である。松前から青森に戻ったのは同じ年の八月だった。大飢饉の直後であるため、惨状は言いようもない。善知鳥神社が巡見所に指定された。謡曲や浄瑠璃で知られた旧跡なのに、土地の人は何も知らず、社殿はみすばらしい。厳島明神を勧請したというのが明証はなく、併祀する宗像明神も津軽侯にゆかりがあるというだけで、「名に

聞しとは大違ひの処」だという。うとうの歌や説話はさまざまあれども、いずれも「和歌者流好事家の説にして埒もなき論也」と断じている。一行が呼子鳥について語らっていたとき、それを耳にした土地の人足が、「呼子鳥と称する鳥は鶴の事」だと話したという⁽¹⁷⁾。名にし負う善知鳥の故地といえども、それは歌枕の名所というばかりで依然未知の土地だった。現地を訪れた者が幻滅するのも無理はない。

語源探求の深化

曲亭馬琴の『にまぜのき烹雑記』に記事がある。文化八年（一八一二）刊行の随筆集である。「多湊さとはぶり」の項は佐渡に関する種々の考証であり、相川の鎮守である善知鳥大明神について記している。そこには「陸奥の方言に、海浜の出崎を、うたふといふ」とある。これは前述の『吾妻鏡』に記された「有多宇末井之梯」を踏まえた発言だろう。青森市街から陸奥湾に沿って国道四号線を北東へ進むと、旧道の県道二五九号線に分岐する。海ぎわの旧道をたどると、高く突き出た断崖があつて、有多宇末井之梯の古戦場跡がある。現在は善知鳥崎と呼ばれ、海浜の出崎というにふさわしい景観である。

外の浜にいる水鳥は、くちばしのつけ根に高く突き出たところがある。それだからこの鳥をうとうと呼ぶのだという。出崎ともども「さし出たる処を、うとふといふは、東国の方言なり」と馬琴は記した。美濃に「うとふ村」があり、信濃に「うとふ坂」がある。どちらも

「さし出たる処」なのでその名がある。親鳥が「うとう」と鳴けば、雛鳥が「やすかた」と応えるというので歌に詠まれてきたが、それは理に合わない。荒磯の「安かるべき干潟」に子を産むから、やすかたと言うのではないか。「親を出崎に比てうとふといひ、子を干潟に喩てやすかたといふ」と理解する方が無難だが、辺境のこととて伝聞のあやまりもあるうから、推論にも限りがあるという。いずれにせよ、「みやこ人は、その名だに、しかとしらざる鳥にやありけん」と馬琴は記した⁽¹⁸⁾。やはり歌枕や説話の世界のこととして理解されていたのだろう。ただしこの語源説は、近代になってから一面において支持された⁽¹⁹⁾。

幕府編纂の『古今要覧稿』に記事がある。同書は古文獻を対象とした類書で、一千巻の予定であったが、総判を務めた御家人屋代弘賢が天保十二年（一八四二）に没したため未刊に終わった。うとうに関する記事は、小山田与清の『松屋筆記』に引いてある。御徒目付の野中新三郎が文化三年（一八〇六）に蝦夷に渡った。うとうはその頃には松前にも飛来しなかった。明和年間（一七六四―七二）に松前藩の家臣が三、四百里遠方の無人島で異形の鳥を鉄砲で撃ちとめたところ、仲間の鳥が鳴きながら雨のごとく露を降らせた。公家の花山院家の家来がこの話を聞き、うとうにちがいないと上奏したことがあった。新三郎は「西蝦夷の内テウレといふ嶋ヤンケシリといふ嶋の辺」までおもむき、漁民に捕獲を命じた。これは天売島と焼尻島のこと、現在

もうとうの巢があることで知られる。漁民が網で捕らえようとする
と、かつてと同じく鳴きながら雨のごとく露を降らせた。謡曲には血
の涙を降らすとあるが、これは「涙にあらざるがごとし。口より津液
をしたゝるにや」という⁽²⁰⁾。

『松屋筆記』は弘化二年（一八四五）頃までに集成された。うとう
に関する種々の文献を摘録しており、掲載順に示せば以下のとおりで
ある。すなわち、謡曲『善知鳥』『古抄』『春雨抄』『宗恵松葉集』『和
歌名所追考』『類葉集』『陸奥名所寄』『秘蔵抄』『藻塩草』『築鳥草子』
『新撰歌枕』『物品目録後編』『大和本草』『奥羽観迹聞老志』『吾妻鏡』
『廻国雜記』『京雜記』『和漢三才図絵』『東遊雜記』『新撰字鏡』『類聚
名義抄』『本草啓蒙』『安斎隨筆』『謡曲拾葉抄』『古今要覧稿』であ
る。

与清は『古今要覧稿』釈名の条に、うとうを松前方言で「つなぎ」
としたのを受け、「一鳥捕らるれば衆鳥跡をつなぎて悲鳴するゆゑに
や」と述べている。これは前述の『松前志』の記述とは異なり、新三
郎なりの観察にもとづく見解にちがいない。また、うとうが砂に穴を
掘って子を産むがゆゑに、「鳩^{うと}の字はた同義也」としたのも注意され
る⁽²¹⁾。博物学的な関心と語源探求は幕末までつづき、やがて鳥獸図誌に
その姿が表現されるに至った。

屋代弘賢の『不忍禽譜』に図と記事がある。同書は天保四年
（一八三三）頃に編纂された。第一葉にうとうの親鳥の図を載せる。

題辭は欠落している。以下、第二葉に「善知鳥雛歟」として雛鳥の図
を載せ、第三葉に「善知鳥之卵」として卵の図を載せる。第四葉は親
鳥の姿を白描で載せ、第五葉はふたたび親鳥の図、第六葉は「ウトウ
図」として親鳥の彩画を載せたのち、謡曲の歌と説話を引き、さらに
前述の伊勢貞丈の記事を掲載している⁽²²⁾。彩画の下に「苕溪手摹」とあ
る。苕溪は山水花鳥画の絵師として知られた宋紫山の号である。

ふりかえってみれば、うとうはもともと文芸世界の存在だった。そ
れが近世になると海鳥の実物解明へと方向転換した。これは歌枕につ
いても同じことが言える。本来は歌の枠内に位置づけられていたもの
が、実際の土地への関心が昂じていき、やがて歌枕の地が具体的な名
所として次々と確定していく。まのあたりの景観に詩心が高揚するこ
とは措いても、海鳥の涙の実体が口内分泌物であることが明らかに
なって、いったい何が深化したのか。近世に科学的考察の意欲が旺盛
になったにはちがいない。だがそのことが、文学創造の沃野を瘦せた
ものにしてはいないだろうか。

「曾止^{ソット}の浜人」を自称する西沢敬秀が『善知鳥考』を刊行した。嘉
永六年（一八五三）の自序がある。本編二巻と拾遺二巻から構成さ
れ、善知鳥の名を冠した書物として空前の規模である。およそ善知鳥
に関連するあらゆる事項を網羅すべく、本編拾遺ともに「陸奥国」か
ら説きはじめ、「津軽郡」「曾止乃浜」すなわち外の浜、さらに「青
森街」「安方」へと、それぞれの場所の特定と地名の考証を進めてい

く。ついで善知鳥の語源と表記について論じたのち、善知鳥神社の起源と沿革に及ぶ。引用書目は『古事記』『日本書紀』『万葉集』『延喜式』にさかのぼり、はては「いささけき日記様のもの等に至る迄も^{アカシ}明証となるべき限りはのせたり」という。ただしその範囲は『松屋筆記』の博搜には及ばない。そのなかで『石上私淑言』や『古事記伝』など本居宣長の著作からの引用がやや目を引く。

本編上巻に謡曲『善知鳥』について言及がある。「烏頭文次安方といへる漁獵者」の身に起きたと記すが、この人名はどこから得た情報なのか。作品の評価については、「思ひたらぬほどなる人のいひなせる、はかなきひがこと」とあって、にべもない。⁽²³⁾ 本編下巻では、善知鳥の語源を「歌ふ」と「訴ふ」の両義から縦横に論じた末に、その名は「啼声によりてなること」という結論に落ち着いている。⁽²⁴⁾ さらに善知鳥の表記を縷々論じたなかで、善知鳥と悪知鳥の名について、葎^{アヲ}と葎の茂みに群れる鳥ゆえに「葎千鳥、葎千鳥といへる義にてあてたる」にちがひなく、これに「善悪にかけていへる」ものと見なした。⁽²⁵⁾ 総じてその判断は穩当かつ凡庸である。

うとうの考究は幕末に現れたこの百科全書的な著作において、ひとつの到達点を迎えたと言える。このような知の総体化の埒外で、かつて文芸への沈潜が営々とおこなわれていた。それは人目にふれることさえ限られた環境のもとでのいとなみだった。次章でふりかえってみたい。

六 ある旅人の探求

歌枕見まほしとて

うとうに関して多方面からの考察が進むなか、そうした動向とほとんど没交渉にこの鳥を追いつづけた人がいた。徳川の世もなかばを過ぎた頃である。菅江真澄は奥羽から蝦夷地を旅し、紀行と地誌を数多く書き残した。天明三年（一七八三）二月に数え年三十で故郷の三河を発ち、三月に信濃に至り、塩尻から更科を訪れた。諏訪の近くで新年を迎え、六月に越後を経て奥羽に向かい、九月から出羽に入国して年を越した。天明五年（一七八五）八月三日に津軽領へ入るところから、日記『そとがはまかぜ』がはじまる。深浦から五所川原を経て、十二日に津軽野に至り、広崎（弘前）に数泊した。奥羽一帯は連年の飢饉が終熄しない。道沿いの悲惨なようすがつぶさに記されている。

八月十八日に青森の港に到着した。「安渴といふ町あれど、みなやけたり」とある。前々年に火災があり、仮小屋が建ち並ぶばかりだった。「烏頭の宮といふかん社」も類焼したという。昔はあたりの浜辺に「善千鳥、^{ヨシチトリ}悪千鳥^{アシチトリ}」という鳥が群れ飛んでいたが、今ではもう見られない。「うとうやすかたといふは、よしちとり、あし千鳥ならん」と真澄は記した。うとうに関する最初の記述である。善千鳥と悪千鳥について、真澄は後年ふたび説いているので、これはのちほど取りあげたい。

はるかに蝦夷地に思いをはせながら、海をわたれる日はいつになるかと神前でうかがいを立てた。すると「たゞ三とせをまつべし」という神意がくだされた。世間がまだ飢饉で騒然としていた頃である。真澄はこのたびの出立を思いとどまり、渡航がかなう時節を待つことにした。⁽²⁶⁾

翌八月十九日、「有多宇末井の梯見にいかんと」海沿いの道をたどった。そこへ鍋釜を背負い、おさな子をかかえた男女が道にあふれんばかりにやって来る。聞けば「じにげ」するのだという。これは地逃げのことである。凶作に見舞われた土地では、人々は家を捨て、米のできそうな場所を求めて移動した。空き家が至るところにできていたので、そこに住み着く者もいるが、のたれ死にするのが大方だったという。⁽²⁷⁾ このありさまでは、これ以上先へ進んだところで自分もいつか飢えてしまう。もとの道を引き返すしかなかった。⁽²⁸⁾

最初の青森滞在で得られたものは少なかった。真澄が訪れたのは、うとうの神社と外の浜であり、訪れようとして果たせなかったのは有多宇末井の梯である。いずれも歌の名所であり、世に知られた旧跡である。行った先々で古歌を引き、みずから歌を詠んだ。これは真澄のひとつの方法である。信濃に滞在したおり、「あさゆふ、こととひむつびたる」若い友人がいた。政員という名で日記『くめじのはし』に出てくる。真澄は別れにのぞんで、「古き歌の心をわきまへ新しきをもかひ求めて」と語った。真澄の作歌の心がけともいべき言葉を政

員は自身の日記に書きとどめていた。⁽²⁹⁾

真澄は歌詠みである。旅のひとつ目的は、歌の世界に伝承されてきた土地を自分の足で踏破し、その風景に感応して歌を詠み、これこそほぐことにあった。歌枕見まほしとて杖をとどめた西行のおのれをなぞらえたにちがいない。今では北日本の民俗誌を大量に記した人として知られるが、もとよりそれは真澄の偉大な一面ではあっても、それがすべてではなかった。⁽³⁰⁾

古歌を引くすが

真澄は南へくだった。同じ月、八月二十二日に津軽国境を越えて秋田領に入り、翌々日に十二所の関を越えた。『そとがはまかぜ』はそこで終わる。南部領に入ってから、歌枕として知られた末の松山のありかを探して歩き、領内で年を越した。翌天明六年から八年(一七八八)まで平泉や仙台に逗留し、歌の名所を訪ねて時を過ごしたのち、ふたたび北上を決意した。七月六日に津軽領に入るところから、日記『そとがはまづたい』がはじまる。野辺地を通過し、浅虫の浦に至った。翌日は朝から潮風が強い。磯をつたい、念願だった有多宇末井の梯にたどり着いた。

海ぎわの断崖の上に板を渡してある。ふりあおげば茂みのなかに「^{あきつ}蝦夷都が窟」が見えた。かつて「あら蝦夷人」が岩屋にこもり、船を襲って掠奪をおこなったという。ここでも真澄は古歌を引く。「お

くの海夷がいはやのけぶりさへおもへばなびく風や吹らん」とある。文言はやや異なるが『壬二集』に収める藤原家隆の歌である。⁽³¹⁾ところで、このもと歌は「恋歌あまたよみ侍りしとき」の作であって、およそ海賊とはかわりがない。ここにも真澄の日記のありようが顕著に現れている。眼前にひろがる風景にこだわることなく、ほとんど無関係に、記憶の引き出しから古歌を取り出されていく。⁽³²⁾それによって旅路を歩むという現実の行為が、つねに広大な古典の世界につながる。そのことが大事だった。うとうに関するのちの発言を理解するうえでも注意したい。

万葉の時代は知らず、実景との乖離はむしろ後世の歌の伝統と言ってよい。蝦夷人はこのような所に住んでいたのかと真澄は感嘆する。やや先のことになるが、蝦夷地にわたったのち、安可加美という浜に「蝦夷がいはや」があると記した。『えみしのへさき』に記事がある。⁽³³⁾家隆が「おもへばなびく風や吹くらん」と詠んだのも、「さんべき処をいふにや」という。このような場所を言うのかと記したのである。浅虫の海岸で家隆の歌を思い出したのは、つい九か月前のことだった。そのとき「蝦夷はかゝる処に多く栖たらんを、むかし人もしかながめ給へり」と記したはずだが、そんなことさえとうに忘れた如くである。さらに後年、下北の尻屋の海岸でも同じ感慨にふけっている。⁽³⁴⁾家隆も三度目である。所詮は古歌を引くすがに過ぎなかったのか。

うつぼなるもの

浅虫のくだりに戻ってみれば、そこから海沿いにくだって、その日のうちに真澄は青森の町に着いた。善知鳥神社を再訪し幣を手向けた。ここで土地の言い伝えを記している。それは延喜の御代というから、平安時代の中頃のことである。善千鳥と悪衛がおびただしく群がり、田を荒らして稲が実らなかった。国の民が都へ訴えたところ、海鳥の大群を捕らえさせ、むくろを積みあげて塚を築いたという。

つづいて真澄はある流人の伝説を書きとめている。鳥頭大納言藤原安方朝臣^{やすかた}という高貴な人が流罪に処されてこの地で亡くなった。その亡魂が鳥に化して海を飛びかい、磯辺で鳴いていた。土地の人々はこれを鳥頭の名で呼び、鵠大明神^{うしろう}として祀ったという。⁽³⁵⁾「うとう」は尊称、「やすかた」はその人の名ということになる。真澄はこれを「浦人の耳に残たる物語ども」として記している。歌の世界では「うとう」は親鳥の鳴き声、「やすかた」は雛鳥の鳴き声であって、ふたつは切り離せない歌ことばであった。青森の港の伝承は語の由来のひとつの説明にはちがいない。真澄はこれだけのことを記したのち、みずからの見聞にもとづく解釈を提示する。

いわく、陸奥では「空なるもの」^{ウツボ}をうとうと呼ぶ。うつろになった木をうとう木^{ウツボ}と言い、うとう坂やうとう山もそこかしこにある。この鳥が海辺に穴をこしらえて巣にするので、「空鳥」^{ウツボドリ}と呼ばれたという。⁽³⁶⁾ここで真澄は南部の山里での経験を持ち出してくる。とある坂道で

乗っていた馬が「とゞと」踏みとどろかしたので、人に問えば、ここは「空坂」^{ウツワザカ}なのでこのように鳴り響くと答えた。真澄は信州で「うたふ坂」という山路を越えて塩尻に向かったことがある。⁽³⁷⁾のちに津軽では「空山」^{ウツタウ}をのぞんで岩木山に登った。⁽³⁸⁾こうした経験にささえられた発言なのである。

つづけていわく、善知鳥神社の近くに大きな沼があり、うとうが群れていた。ここはもと海につながった潟で、「椰須」^{ヤス}という木が茂っていたので、土地の人は弥栖潟と呼んだ。古歌に「みちのくのそとがはまべの喚子鳥鳴なる声は善知鳥やすかた」とある。その「こゝろばへ」を問えば、外の浜で雛を呼ぶのは空鳥^{ウツワドリ}、その棲むところは安潟かと、古人はそうのように思いをさせたのだという。⁽³⁹⁾

真澄は最後にこう記す。語りたいことはさまざまだが、ここでどめておき、あとは「ことふみにのせつ」とした。別の書物に載せたというのである。ここまで読んできた日記『そとがはまづたい』は天明八年（一七八八）に書かれたものだが、その後いく度か改写されている。年代の下限は秋田藩校明德館に日記を献納した文政五年（一八二二）であろう。⁽⁴⁰⁾「ことふみ」に言及したこの一節はそれまでに書き加えられたにちがいない。

文化九年（一八一二）に書かれた随筆『みずのおもかげ』は先ほどの「空」^{ウツ}説を再説したのち、「おのれ、善知鳥の考に、外が浜風といふものにも、つばらに此事記しぬ」と述べている。⁽⁴¹⁾「外が浜風」は

「外が浜づたい」の誤記であろう。⁽⁴²⁾ここに言う「善知鳥の考」が『そとがはまづたい』に記された「ことふみ」にあたると考えられる。そうであれば、うとうに関する専著の撰述は文化九年以前ということになる。そしてこれは散逸した書物であった。

失われた書物とその後

昭和十三年（一九三八）一月『秋田魁新報』に「真澄翁の善知鳥考」の記事が掲載された。⁽⁴³⁾秋田県仙北郡の今時庵旧蔵の一写本に、失われた「善知鳥考」のあらましが記されていたのである。「菅江翁の曰」とあるから、真澄の直筆本ではない。つづけていわく、陸奥出羽を三十年あまり巡るあいだに書き集めたなかに「善知鳥考」という書物を著したが、「人の借りて失ひにき」という。つまびらかに思い出すのは無理なので、「あらましをいはん」とある。⁽⁴⁴⁾この記述を信頼するならば、これは真澄本人からの聞き書きということになる。真澄は自著の写しをとっておくのが常だから、人に貸して紛失したというのも不審だが、それでも散逸書の一端なりともうかがうことのできる貴重な文献であることはまちがいない。写本の該当箇所には「うたふやすかた」の題記がある。ここでもそれにならいたい。

この書「うたふやすかた」は馬琴批判からはじまる。前の章でふれた『烹雜記』への反論である。いわく、自分はこれまで青森の港、外の浜、松前の浦を巡ってきたが、馬琴が言うところの「海辺の出崎」

あるいは「さし出たる処」をうとうと呼ぶ方言は聞いたことがない。陸奥に限らず、空洞のある「竅木」^{ウツホギ}を「空木」^{ウツキ}と言い、踏めば鳴り響く坂道を「窕坂」^{ウツザカ}と言うのがならいである。うとうは外の浜にはほとんどおらず、松前の小島に棲息するばかりである。昼は海で獲物をあさり、暮れ方に小島へ戻ってくる。穴をねぐらとし、翌朝また巢から出て海に向かう。そこでこの鳥を「竅鳥」^{ウツフ}と呼ぶ。「空ふ」^{ウナ}が語源であり、「鵠」の表記も知られるとおりだという。博引旁証の書齋人馬琴に対し、現場主義を誇って反駁を加える。これは真澄の常套手段である。

つづけていわく、うとうを松前では小島鳥と呼ぶ。土地の人は「繫」^{ツナギ}や「七里」^{シナチリ}の名で呼んでいる。この鳥はくちばしのあたりに「鈎刺」^{カギバリ}があり、イワシほどの小魚を刺し通して繫いでおく。それで繫と呼ぶのである。また「七里が灘」までつづくほどに群れている。そこで七里と呼ぶのだという。⁽⁴⁶⁾ 繫鳥や七里鳥のことは『そとがはまづたい』⁽⁴⁷⁾にも記してあった。ただし真澄みずから言うとおり、外の浜ではもはや姿を見ることができないならば、その箇所は蝦夷地の見聞を経たうえでの後年の加筆にちがいない。⁽⁴⁸⁾

これにつづいて、かつて青森の港で聞いた話がやや詳細に語られる。うとうの大群が被害をもたらすので捕獲したくだりである。夜のうちに網を張って親鳥を捕らえ、すみかの穴を襲って雛鳥や卵を捕らえた。親鳥が雨のごとく雫を振りまくさまは、簑を着て取ると歌に詠

われたとおりである。捕獲は数年におよび、むくろを積んで築いた塚の上に祠を建て、鳥の霊を弔った。これが「元青社」^{アラモリ}と呼ばれた神社で、のちに安潟町に遷座して烏頭明神としたという。⁽⁴⁹⁾ 話の後半は『そとがはまづたい』の記事と異同がある。そこでは烏頭大納言の霊を弔った神社とされていた。

最後に安潟の由来を説いて、そこは「安木生えたる湖」^{カタ}であることを再確認する。⁽⁵⁰⁾——以上が「うたふやすかた」の概要である。すでに述べたとおり、これは真澄からの聞き書きを記録した写本であって自筆本ではない。『みずのおもかげ』が記す「善知鳥の考」の原本は依然として失われたままである。

うとうに関する真澄の発言はほかにもいくつか見られる。地誌『雪の出羽路雄勝郡』の草稿が『かせのおちは』に収めてある。これは草稿類を整理して集めた書物である。沖沢村の稲荷大明神について「窕坂に座り」^{ウツザカマセ}として割注を附す。いわく、「此空坂、出羽陸奥にいとく多し、おのれ書し、善知鳥考、しの、葉艸につばらに此坂の事をいへり」⁽⁵¹⁾とある。「善知鳥考」は例の散逸書であり、「しの、葉艸」は真澄の最初の随筆とされる『しのはぐさ』である。文化八年（一八一二）以後の成書とされる。⁽⁵²⁾ 失われたうとうの専著に前後して書かれたにちがいない。

『しのはぐさ』の「善知鳥社」^{ウツウノミヤシロ}の項は、やはり馬琴批判からはじまる。『烹糲記』の冒頭を引いて、陸奥の方言で「海浜の出崎」につ

いて述べたところで、つづく本文が欠落している⁽⁵³⁾。現存冊子の二十五丁裏まで文字が埋まっており、これに接続するはずの二十六丁以下がない。この「善知鳥社」の項の一部が「陸奥国毛布郡一事」を記した写本の裏書に残存する。先ほど紹介した「うたふやすかた」のなかの「繫」と「七里」の記事に該当する箇所を収めている⁽⁵⁴⁾。これも真澄の自筆とされる。原稿の柱に「しの、はぐさ一 十三」の文字があるから、草稿として準備されたことはまちがいない。しかし清書本では破棄された。自信満々で馬琴説に反駁を加えたのではなかったか。あれほど夢中になっていたとうの考察はどこへ行ってしまったのか。

その後、真澄は随筆『ふでのまにまに』でわずかに「うとほのやしろ」について記した。これは安潟町の「鵠明神^{ウツホ}」のことである。また、「空^{ウツ}にのみ栖^{スメ}ば、うつほ鳥といふべきを、うとふとのみぞ云ひける」として、「空木^{ウツフキ}」や「うたふ坂」に言及した。自著である「鵠考といふ一巻^{フミ}」にもふれている⁽⁵⁵⁾。この随筆は文政七年（一八二四）以前に書かれた。

地誌『雪の出羽路平鹿郡』に記事がある。「鵜飛田^{ウツフタ}」の村について、佐竹藩の地誌である『郡邑記』に「善知鳥蓋^{ウツボク}」の名で記載されたことを指摘する。さらに河辺郡には「善知鳥村」があり、そこに「踏^{フミ}はしとく鳴^ナる坂」もある。善知鳥坂という地名はどこどこにあり、いずれも「空虚地^{ウツホノコトコロ}」を言うとして述べている。外の浜にいた善知鳥は今では松前の海に棲息するだけだが、土に穴を掘ってねぐらとするので

「空虚鳥^{ウツホトリ}」と呼ぶ。出羽の地にゆかりはなくとも、ここに記しておくのだという⁽⁵⁶⁾。この地誌は文政九年（一八二六）にほぼ稿を終えている。文政十二年（一八二九）まで書きついで『月の出羽路仙北郡』にも記事がある。千屋村の東に善衛山があり、「うつほ山をしかいふなるべし」と注している⁽⁵⁷⁾。残されたもののなかでは、うとうに関連する最後の発言である。この年七月、真澄は七十六歳で死去した。

晩年に至るまで、うとうの語源は空^{うつほ}であるとの自説を捨てなかった。海岸に空洞をうがって雛を養うことに名の由来を求め、空洞のある坂をうとう坂と呼ぶ事例を傍証としてつけた。みずからの足で歩き見聞きすることを信条とし、うとうについて追求してきたはずだ。専著まで著しながら、なぜその勢いがやんでしまったのか。『しののはぐさ』で考察を放棄して以後は、ただひとつの自説に固執したように見える。なぜうとうにこだわりつけ、そして断念したのだろう。このことは章を改めて考えてみたい。

七 なぜ放擲したか

古き名どころを尋ねて

うとうに対する真澄の姿勢について疑問に思うことが二点ある。一は、なぜ彼はうとうを追求しつづけたのか。二は、それにもかかわらず、なぜその考察を途中で放棄したのかである。完成していたはずの「うとう」に関する著作をなぜ手元に残さなかったのか、ということ

も第二点に連動する。

疑問の第一点については、真澄が書いたものから理解できるところがある。それは歌枕の探訪であつた。歌枕の地を实地踏査したうえで、みずから歌を詠み、いつかそれをまとめて名所図絵のような形で出版しようと意図したことが知られる。うとうは外の浜にかかわる重要な主題だったにちがいない。ただ、これはかなり表面的な理由である。もうひとつ注目したいことがある。それは真澄の家族、もしくはきわめて近い間柄にあつた者の死が関係している。このことは作品にじかに現れているわけではない。したがって推測していく以外にはないことがらである。同様のことが疑問の第二点についても言える。これは疑問の第一点を踏まえたうえで考えていきたい。

真澄は歌人であつた。歌枕の地や名どころの探訪は旅の大きな目的であつた。真澄が私淑した本居宣長は『玉勝間』に記している。「古き名どころを尋ねる事」と題された一節にいわく、古い神社、かつての名どころ、歌枕の地など、今では場所も定かでなくなったものが多い。太平の世なればこそ訪ねてみたいものだが、相応な困難がともなう。こうした古跡を訪ねる事業は、ただ昔の書物だけに頼つて考えていたのではおぼつかない。どれほど考察をめぐらせても、書物をもとに推断したことは、その場所に行つて確かめてみると、大いに違つている場合が少なくない。「書^{フミ}もて考へ定めたることは、其所にいたりて見聞けば、いたく違ふことの多き物也」という⁽⁵⁸⁾。現場主義の標榜で

ある。とはいえ、町医者が本業の宣長には実行不可能な方法だった。真澄はあえてこの難事業に取り組んだのである。

『玉勝間』は寛政七年（一七九五）から順次刊行された。真澄はこの書物からの抜き書きを『玉勝間拾珠抄』にまとめているが、これは後年のことである。旅をはじめたころにはまだ『玉勝間』は世に出ていない。しかし真澄がめざしたのはこの国学の先達の精神を体现しようとしたことだった⁽⁵⁹⁾。

現地探訪の心意気は晩年まで変わることなく維持された。随筆『くぼたのおちば』のなかで、秋田藩士人見寧の著書『黒甜瑣語』を批判して言う。この書は現地に足を運ばずに書いたと見えて、場所の特定や方角の是非、時期の錯誤など、はたしてそのとおりなのか疑わしいところがある。「実地^{ソツコロ}を踏^{フマ}で人の物語^{モノガタリ}のみを聞て、先ツ筆をとれり」と見えて、国とところ、東西、時世のたがひもあらんかとおもはる、処あり⁽⁶⁰⁾という。こうした姿勢は後述する馬琴批判でもくりかえされる。

真澄は文政十二年（一八二九）に秋田で死去した。三回忌に知人らの手で墓碑が建立され、故人の事跡が碑に刻まれた。そこには「いそのかみ古き名どころまきあるき書けるふみ」という文字が見える⁽⁶¹⁾。真澄が理想としたものを端的に語つていよう。

うとうの故地である外の浜を訪ね、旅の先々でうとうの名のつく場所を通るたび、土地に即してその語源を考えつづけたのも、まさしくこの理想に根ざしている。うとうの探求は真澄のなかでひさしく継続

した好個の事例であった。これはうとうに限らないが、考証だけでなく、現地で詠んだ歌を取り入れ、絵図を附していつか刊行しようとした。そのことは画稿集『粉本稿』の序文にも記してある。各地の名称や名物、風俗などを文字に記し、つたないながらも絵に描き、これを画工に依頼して書物にまとめたい。「かゝるくまゝのこりなふつくり画の工なる人にかたらひて、ものせむと」と述べていた。⁽⁶²⁾

真澄は自著が刊行されることを期待しつづけた。日記の写しを何部も作って人に贈ったのもそのためだろう。あふれるほどの見聞と古典の教養に裏打ちされた浩瀚な著述がありながら、世間はそれを一冊として開板しなかった。江戸の版元は馬琴が書きあげるのを待ち構えて本にした。そうした作家が現れた時代である。若い日の真澄が「古き歌の心をわきまへ」云々と信濃の友人に語ったことはすでに述べた。これにつづく言葉は「古郷にかへらまくほりすなどの給ひて」である。故郷に帰って何をするつもりだったのか。書物のひとつひとつに美しい題名をつけたのは何のためか。だがその計画もむなしく、彼の著述はついに世に出ることはなかった。うとうに関する專著にいたっては、ついに紛失したままとなったのである。

「はやい、はやい」

真澄はなぜ、うとうを追求しつづけたのか。さらに別の視点から考えてみたい。そのための大事な手がかりが日記『はしわのわかば』に

ある。これは天明六年（一七八六）に書かれている。蝦夷地への渡航をいったん断念した真澄は、飢饉をさけて南部領に入り、歌枕の地や名どころを訪ねて歩いた。木々の茂みで時鳥ホトギスが鳴くの子どもらが聞いている。それにちなむ昔話をひとくさり語ったあとで、真澄は若いときの回想を記した。

ある年の夏のことだった。尾張の国名古屋で五つ六つばかりの男の子をつれて社寺に詣でた。多くの人出である。時鳥が鳴くのを聞いて、その子が笑った。どんなふうに鳴いたのかと聞くと、「父トツサへ母カ、サへ」と答えたので、居あわせた人々がどっと笑った。やがてその子は「麻疹アカモカサ」にかかって死んでしまった。親たちは思った。時鳥は黄泉の国の鳥にちがいない。早く来て、早く来て、「はやこゝ」と父と母を呼んでいる。季節が来れば、時鳥は血の涙を流して鳴く。「あなかなし」と耳をふさぐばかりだったという。⁽⁶³⁾

真澄はなぜこのことを語ったのか。名古屋での社寺参詣、利発な子の答え、突然の死、尽きることはない親の痛み、その顛末をまるでわがことのように知っている。「その親ども」と突き放して語りはするが、もしかしたらその親とは真澄本人ではないのか。そのことをすでにこの一節から読み取った人がいる。⁽⁶⁴⁾これは重大な指摘だと思う。言うとおり、たしかな根拠があるわけではない。だが、これだけのことをまったくの他人が語りきれるだろうか。真澄本人のことでないとしても、ごく近いはらからの身に起きたこととしか思えない。

真澄には早世した弟がいた。最初の日記『いななかみち』に、お盆の魂祭りのことが書いてある。ある家で供えものの棚に向かったとき、「世になき母弟の傍も、しらぬ国までたちそひたまふや」と思いをつのらせた。みまかった母と弟のおもかげがまぶたに浮かぶ。こんな他国にまで寄り添ってきってくれるのか。そう思うと、涙があふれてやまない。その思いは歌に詠まれた。「この夕ありとおもへばは、き木やそのはらからの傍にたつ」とある。⁶⁵このとき真澄は数え年三十である。先ほどの、はやり病で亡くなった子が、はたして真澄の子か、実の弟か、あるいは弟の子か、それはもはや知りようがない。それでもこれを語る身にとってさえ、身を切られるほどつらい日々だった。頑まないまま死んでいった子をおしむ。そうした親の思いが、これから先も日記のなかに点綴される。つづく日記は『わかこゝろ』と名づけられた。題名は「わかこゝろなくさめかねつ」の古歌にもとづく。慰めようのない心を生涯いだきつづけていくのか。

真澄はやがて蝦夷地にわたった。松前に来てすでに三年が過ぎたころ、海沿いに東へ向かった。古い御堂があるほどの土地柄か、何か由緒があるらしく、小さな子がことばも確かに歌うのを聞いた。奥のわらべ唄かと感心していると、その由来を教えてくださいました人がいる。はたとせ前のこと、はやり病で多くの人が死んだ。山向こうの磯浜の娘が十六で病に伏した。もやはこれまでというとき、起きなおって両親の前で膝を正した。高熱のためかといぶかると、娘は自分でこしらえた

唄を口にした。「誰れもゆくものあの山かげにわれも逝くものとさきに」と、三たびくりかえし、眠るようにしてことされた。真澄は記す。「父母のなげきやおもひやるべし」と。はじめて聞くその物語に「ゆく袖ぬれて、遠う来けり」という。⁶⁶これも思い纏綿とした書きぶりである。どんなに遠くへ来ようとも忘れることのできない昔があつたにちがいない。

蝦夷地から陸奥へ戻ったあと、真澄は故郷に帰らず、しばらく下北半島に留まった。日記『おくのうらうら』は寛政五年（一七九三）に書かれている。真澄はすでに四十になっていた。前年の十月末に雪を押して恐山に登り、翌年の四月にふたたび登攀した。六月になるとすぐにまた山に向かう。このたびは長逗留である。月の二十三日には恐山の地藏堂で恒例の地藏会があり、亡き魂祭がおこなわれる。そこに参会したのである。

前日から仮小屋がもうけられ、当日の昼には大勢の人が集まってきた。修行者の一行が「かなつゞみ」を打ち鳴らしている。卒塔婆塚の前に棚が築かれ、草花が供えられた。おびただしい男女が^{まさほとけ}枉仏という板を六文銭で買い求め、亡き人の戒名を書いてもらってこの棚に置く。水を注ぎながら、みまかった妻や子や孫の名を呼ぶ。名を呼びながら泣き叫ぶ声があふれ、念仏の声が、全山に響きわたりこだました。「あまたのなきたま呼びになき叫ぶ声、ねんぶちの声、山にこたへ、こだまにひゞきぬ」とある。「おやは子の子はおやのためなきた

まをよばふ袂のいかにぬれけん」と真澄は歌を詠む。ひとりの女が袋から散米を取り出し、水を注いで声をあげた。あたしの子が賽の河原にいるなら、ひとめでいいから逢わせて……。『あが子が、さいの河原にあらば、今一め見せ』と泣きながら、しばんだ撫子を柵の上に置いていた。やがて日も暮れ、人々が御堂や仮小屋に押し寄せた。どうめきあう声にまじって山鳥が鳴いている。⁽⁶⁷⁾

翌日、夜の明ける前に集まった者たちが「南無からだせん延命ぼさち」と唱えている。伽羅陀山延命地藏菩薩の名号である。人々が居ならび、数珠をもんで額にあててひざまづく。頭のかぶりものが落ちるのもかわわず、わが子わが孫の亡き魂を数えあげては涙をぼたぼた落としている。「わが子、むま子のなきたまをかぞへ／＼てなみだおとし」とある。日が昇るころ、本坊の円通寺から来た大徳が読経をはじめた。もろもろの地獄をめぐって亡き魂の柵に至ると、みながいっせいに集まった。これだけの行事が終わると人々は徐々に引きあげていった。⁽⁶⁸⁾

恐山で亡き魂に会おう。親の魂に会いたくて来た者が大多数のはずだが、真澄にとっては関心の外である。わが子を亡くした親の姿、その嘆きの声だけが心にしみる。やはり真澄は子を亡くしたのではないか。そんな思いが迫ってくる。この前後二日は日記中の白眉だと思う。三年におよぶ下北滞在もここに向かって収斂している。

なみだの雨に

名古屋で子をなくした親たちは、時鳥が「血の涙を流して」鳴くとき、子の亡き魂を思った。いったい鳴いて血を吐く時鳥もすでに詩歌の世界だが、血の涙を流すのはまぎれもなく古典につながる。しかもそれは時鳥ではなく、文芸世界におけるうとうの専売ではなかったか。早くは『新撰歌枕名寄』に、「子をおもふなみたの雨の血にふれははかなき物はうとうやすかた」とある。『秘蔵集』に「ますらをのえむひな鳥をうらぶれてなみだをあかくおとすよな鳥」とあり、注に「よな鳥とは、うとうと云ふ鳥をいふなり」とあった。『草根集』に「我そ今身をうたふ鳥紅の泪の簀を君きたれとて」とあり、御伽草子『あさかほのつゆ』に「うとうの、とりの、子のゆへに、ちのなみたを、なかつと、きこへしか」とあった。いずれも本稿前号でたどったとおりである。

真澄は『そとがはまかせ』に「ふるき歌」として、「紅のなみだの雨にぬれしとてみのをきてとるうとうやすかた」と「子を思ふなみだの雨の簀の上にかゝるもつらしやすかたの鳥」を引いている。「血の涙」という言葉に、ただちに真澄はうとうを思い出す。

真澄が謡曲『善知鳥』に親しんでいたかどうかはわからない。曲中に「陸奥の、外の浜なる呼子鳥、鳴くなる声は、うとうやすかた」の歌がある。これは出典が知られていない。真澄はそれを引いている。『そとがはまづたい』には「みちのくのそとがはまべの喚子鳥鳴なる

声は善知鳥やすかた」とある。文字が一部相違する。『善知鳥』は親子の哀話だが、子が親を思うのではない。親が子を思うのである。雛鳥を取られた親鳥が血の雨を降らす。亡霊となった獵師が子に触れようとしても触れられない。そんな話だった。

真澄はあまり自分のことを語らないと言われる。しかし望郷の念はことに触れて語っている。それは父母を慕う心とひとつになつてい⁽⁶⁹⁾た。のみならず、子を思う親の心に寄り添った記事もいくつかある。

天明四年（一七八四）の日記『くめじのはし』に記事がある。真澄三十一歳の夏である。信濃の友入政員の家に立派の挨拶に行くと、年老いたあるじの母が語った。早く旅を終えて父母のもとに戻りなさい。私でさえ、あなたがひとりでたいへんな旅をするのを案じているほどだ。御両親はさぞ心配なさっているだろう。――涙にむせびながらわが子を思うように言う。こんなにも親は子のことと心乱れ思いわずらうのかと涙を抑えた。「かく人のおやの心の、やみにおもひやまへらんと、なみだをとどめて」とある。⁽⁷⁰⁾

寛政五年（一七九三）の日記『まきのあさつゆ』に記事がある。四十歳の秋である。下北半島の北端で宿を借りた。風が強く、夜中に梶をとるような音が聞こえる。鶴が飛ぶ音だった。「よるのつるなれもわすれず子を思ふ親ます国のいとゝ恋しき」と歌を詠み、ひとり涙ぐんだ。ようやく寝ついたものの、故郷に帰る夢で目がさめた。⁽⁷¹⁾夜の鶴も子を思う親の待つ国を恋しがるのか。そんな心である。

翌寛政六年（一七九四）の日記『おくのてふり』に記事がある。四十一歳の冬である。夢を見た。都に家があつて父母がいる。旅から帰った自分に両親が語った。おまえは長旅で疲れたようすもなく、月花の風雅を求めて歩きまわったので、潮風や日光で顔が黒くなった、と笑って迎えてくれた。そこでめざめた。鳥の鳴き声や軒端の雀の声ばかりが聞こえている。「なれもさぞしたふやすめむらがらすこは父となきこは母となく」と歌を詠んだ。⁽⁷²⁾この歌は、あの子の言葉「父へ母へ」と響きあっている。

寛政八年（一七九六）の日記『つがろのおく』に記事がある。四十三歳の冬である。津軽藩士毛内茂肅の家に宿った。茂肅は歌を好み、妻や子とも親しくなっていた。文机から落ちた反古に夫婦の歌が記してあった。末の子が弘前で勉学に励んでいる。それを氣遣う歌だった。それほどに案じている親の心を思うにつけ、自分も故郷が恋しくて涙がとまらない。「たらちねのおやの子を、になうおもふをく、さもこそあるべけれとおもふにも、あが父母のいます国のいとゝ恋しう、なみだほろく」とある。⁽⁷³⁾望郷の思いを述べながらも、子を思う親の心に感じ入っている。

真澄がうとうとのことをずっと心にかけてきたのは、こうした思いがあったからにちがいない。それならばなぜ、途中でその思いを捨ててしまったのか。

白太夫説批判

真澄がうとうの考察を放棄した理由について、明確な発言をした人は内田武志しかない。真澄研究に後半生をさげた人である。発言の前提には、真澄が白太夫の末裔だったとする見解がある。遊歴の生涯を送るのは白太夫の家筋に生まれた者の宿命だったという。それは賤民の身分であり、うとうに関する書物を人に示すのをはばかるに至ったのも、おのが出自ゆえの覚悟があったからだと内田は想像する。⁽⁷⁴⁾ いったい何を根拠に真澄を白太夫の末裔と断じたのか。そもそも白太夫とはいかなる存在か。

真崎勇助採録の『酔月堂漫録』に「菅江氏家方」についての記載がある。これは真澄が佐竹藩御典医の渡邊春庵に贈った処方箋の控えである。「上祖白井太夫より七代の孫白井秀菊翁、産婦に良薬をあたへ」云々とある。白井太夫の子孫が調製した婦人薬で「寿生散」と呼ばれた。⁽⁷⁵⁾ ここに言う「白井太夫」を内田は「白太夫」のことと理解する。また、竹村治左衛門の覚書『伊頭園茶話』に真澄の談話が収められている。「真澄翁ある時ひそかに咄致候を愚父書留置」として、真澄がみずから「菅公之家臣白太夫之末孫之由」と語ったとある。⁽⁷⁶⁾ これは本人が記したものではないが、内田はこれを晩年の真澄が「みずからの何者であるかを表明した言葉」と解した。⁽⁷⁷⁾

『伊頭園茶話』に記された真澄の談話の中で白太夫を「菅公之家臣」としている。菅原道真の伝承と北野天神の縁起を記した『菅家瑞応

録』に白太夫が登場する。菅公の家臣である度会松木春彦は予兆を得て太宰府へ下り、公の薨去を看取った。春彦が没したのち、家臣の仲間の子が菅公の廟の前で白衣の翁に出会った。生前の契りで春彦がつねに廟に侍するのだという。それで白太夫と称されたのである。この書物は『北野天神縁起』をはじめとする天神縁起類の末流とされ、吉田神道に對抗して伊勢神道の布教師が作成した講釈説教の種本と目される。⁽⁷⁸⁾ 講釈本だけあってすこぶる普及し、近松門左衛門の『天神記』や竹田出雲らの合作『菅原伝授手習鑑』に素材を提供した。⁽⁷⁹⁾ この浄瑠璃二作品はともに白太夫を重要な登場人物として描いている。

白太夫は謡曲『道明寺』にも登場する。河内の道明寺天満宮の宮守の翁が白太夫神を名のった。「われは天神^{テンジン}のおん使^{ツカイ}、名をば誰とかしらたいふの、神と申すおきなぐさ」とある。⁽⁸⁰⁾ 『伊頭園茶話』に白太夫の名が出ることにについて、『菅原伝授手習鑑』や『道明寺』などの知識を竹村治左衛門の父吉幹と真澄が共有していた可能性が指摘されている。⁽⁸¹⁾ 当時は白太夫の名は浄瑠璃や謡曲に加えて講談でも知られていた。真澄はこの有名人物の名を家伝薬の宣伝に利用したという推測もなされている。⁽⁸²⁾ 白太夫がどういう存在であるかは真澄自身も書きとめていた。草稿集『かせのおちは』に「伊勢国上山宮祭者祭妙見菩薩事」の項がある。そのなかで『神国決疑編』という書物を引いて、度会春彦は世に伝うところの菅公の聖友で、白太夫神として祀られていると記録した。春彦の名に附された割注に「世伝与菅聖友崇祀白大

夫神是也」とある⁽⁸³⁾。

白太夫は物語の登場人物である。その家系を名のこと自体まったく意味をなさない。ところが内田のこの思い込みは、うとうの考察にもかかわらずいた。真澄がこれを執拗に追求してきたことも、最後には放擲するに至った経緯も、彼が白太夫の家筋であったことにつなげて理解される。うとうに限らない。晩年の内田は真澄に関してそれまで不明とされていた諸事をことごとく白太夫という線に沿って解釈していく。白太夫の家筋が賤民に属していると無批判に想定され、社会の底辺に向けられた真澄のまなざしという、これまたひとつの幻想がそこで調和する。うとうの伝承が死穢にかかわることは白太夫の家筋の者にとって近しかったとしても、周囲の人々からは忌避された。そこに至ってついに長年にわたる考察をみずから葬り去るほかなかった。——そんな物語がひとりの研究者のなかでつむぎだされたのである。

『伊頭園茶話』が記す「白太夫之末孫」という真澄の言葉は、竹村治左衛門の父吉幹が本人からじかに聞いて書き留めたという。真澄は確かにそう語ったのだろう。もちろん戯れ言である。『菅原伝授手習鑑』のなかで菅家下屋敷の庭番四郎九郎が七十の賀に白太夫の名をたまわる場面があった。「伊勢の御師かなんぞの様に白太夫とお付けなされた」とある⁽⁸⁴⁾。竹村の誤伝でないならば、真澄もまた伊勢の御師かなんぞの様に白太夫の末孫を「かたった」にちがいない。

白太夫の末孫を名のる者がいるとすれば、それは伊勢神道の布教師か、あるいはその唱導者であろう。芸能者が猿丸を祖とおぐのと選ぶところがない。その意味においてなら「白太夫之末孫」という名のりも理解できなくはない。真澄は三河国岡崎の里修験の家に生まれたという研究がある⁽⁸⁵⁾。おのれを漂泊の唱導者になぞらえたのはそのためか。もとより実際の出自とは別のことである。

陸奥出羽路の三十年

真澄がうとうの探求の続行を断念した理由は何か。

『玉勝間』の一節「古き名どころを尋ねる事」はすでにあげた。真澄はこれにならない、『くぼたのおちぼ』で人見寧の実地踏査の不備を批判した。これにはつづきがある。人見の次は馬琴である。「大江戸より板にゑりて出たる、瀧沢氏の玄同放言」を組上に乗せた⁽⁸⁶⁾。『玄同放言』は文政元年（一八一八）に刊行されている。

真澄の馬琴批判の論点は四つある。一は胡沙の語義、二は浮島の位置、三は山牡丹のいわれ、四はうとうの語源である。これらは『くぼたのおちぼ』と『ふでのまにまに』と『しののはぐさ』でくりかえし言及された。ここでは胡沙の解釈を一例として取りあげたい。

藤原為家の作とされる歌がある。『夫木抄』に収める「こさふかばくもりもぞするみちのくのえぞには見せじ秋の夜のつき」である。ここに歌われた「こさ」をめぐって論争がおこなわれた。『玄同放言』

はまず従来の一般的な解釈を提示する。こさは蝦夷の息だという。息は海上で霧となつて空を覆う。それだから「えぞには見せじ」なのである。この解釈に対し橘南谿は『東遊記』の中で胡砂説を主張する。胡塵が蝦夷地にまで吹くという。馬琴は南谿の説を評価するが、文献的根拠が示されていないことを不備とする。そのうえで、王維の詩「送劉司直赴安西」に「胡沙」の名で出ていることを明らかにした。

詩には「胡沙」が「塞塵」と並べてある。塞外に吹き荒れる砂塵のことである。馬琴いわく、胡沙は蝦夷地の方言ではない。土地の人に尋ねて要領を得なくとも、現地を歩いたなら胡沙そのものは経験したはずである。もとより遠路探訪の成果は認められるが、書物を博捜することを怠れば、故事来歴があつても見逃してしまうという。「遙けき旅宿の甲斐はあれども、書見る事フミのこ、におよばで、故事ありともいはざりけり」とある。⁽⁸⁷⁾これは書齋の文人たる者の矜持である。この批判はあくまでも『東遊記』の著者に向けたものだった。

真澄も随筆『ふでのまにまに』の中で南谿を批判した。返す刀で馬琴を攻撃する。劈頭に『吉野拾遺物語』という文献を示した。馬琴が「書見る事のこ、におよばで」云々と語るのを逆手に取って、馬琴のあげていない書物を持ち出す。それから蝦夷地での見聞を延々と連ねていく。コタンのアイヌに教えられたことなど、真澄でなければ書くことのできない貴重な証言が示されていることはまちがいない。

『玄同放言』はつづいて出羽国の浮島に関する考証を展開する。そ

こは島遊びの名勝とされてきた。真澄は馬琴のあげた地名はどれひとつとして現地に存在しないと非難する。自分は陸奥国と出羽国を歩きつづけて三十年以上にもなる。名勝があると聞けば見て歩き、わけても出羽路の秋田六郡はつぶさにへめぐった。「おのれ、みちのくいではのくぬちめぐりて三十ミソとせあまりもありて、あやしう珍らしと聞ケば分見めぐり、凡はいではの秋田六郡もつばらかに分見たり」という。⁽⁸⁸⁾

真澄のように現地で活動した人にとって、「行つて見た」ということは絶大な自信となる。もちろん彼は文献にもとづく地名考証も欠かさない。しかし歌枕の地名どころも、いったん現地を訪れると、そこにちがいないとだちに特定してしまう。⁽⁸⁹⁾そうなるともはや変更不能である。現地を踏んでいない者に対しては、絶対の優位を誇つてしまふ。それが現場主義の救いがたい盲点ともなるのだ（ここで現場主義それ自体を揶揄するつもりはまったくない。筆者は若いときヨーロッパの大学で学び、現場主義をつらぬいてきた。自省をこめて言いたいのである）。

真澄がどれほど言葉を尽くして反論を加えても、彼の名はそもそも馬琴の知るところではない。その主張を馬琴も、また南谿も目にすることはなからう。うとうの語源説を幾度くりかえそうと、それは同じだった。

わが心なぐさめかねつ

真澄がうとうと執着した契機は、真澄の書いたものからある程度は探ることができた。ひとつは歌枕に対する憧憬である。歌枕の地をみずから歩いて、古歌を踏まえつつ、その土地と感応することをめざした。もうひとつは子を思う親の気持ちではなかったか。それは問わず語りにときおりもらす思いであった。

うとうへの執着を放擲したのはなぜか。放擲とは言っても、それと言及することは晩年にもまれにはあった。だが、かつてのような情熱はどこに求めようもない。急速に熱がさめてしまったかのようなのである。その理由を明らかにできる資料は見つからない。それでもあえて推してみるならば、自分の声がどこにも届かないことへの慙愧があったのではないか。

真澄の著述は日記から地誌へ移行した。しかし日記を書くことと地誌を編むことは断絶していない。歌枕への憧憬をずっと持ちつづけたことは、地誌の通念をはみだすその書きぶりに現れている。⁽⁹⁰⁾『雪の出羽路平鹿郡』では善知鳥蓋の村にこと寄せて、うとうについて語りはじめた。あげく「こは此処^{ココ}によしなき長事^{モノガタリ}ながら、いまだえ知らぬ人のために、しかなめげながら語る也」と引き取る始末だった。⁽⁹¹⁾外の浜も海鳥もすでに尽力すべき考察の対象ではない。出羽国移住後の真澄にとって、津軽路でのあの奮闘ぶりは過去のことだった。もはや追尋すべき事柄でなくなったのである。

真澄がひとたび三河に帰郷したか否かは明らかではない。それでも「なくさめかねつ」としたかつての心は、それは決して癒えることがなかるうとも、晩年におよんでようやく沈静に向かったのか。親子鳥の哀話に動かされた追憶も、ついに故郷とのつながりを断つに至った人にとっては、秘したまま墓場まで持つていくしかないことどもに属したのかもしれない。老いがせまれば遠い過去の影像ほどもぶたをよぎる。また一方で、ひとつひとつ整理をつけるべきことも明らかになっていく。それも自然の流れのように思う。

北限の海鳥の物語

本州最北の地に伝わるうとうの伝承と文芸の系譜を明らかにすることを本稿はめざした。

本稿前編（前号）では、はじめに謡曲に語られた親子鳥の悲話をたどり、上演記録をもとに作品の成立年代の下限を押さえたうえで、作者に関する議論をかえりみた。その過程で本稿前編において考究すべき論点がいくつか明らかとなった。このことを第一章で述べた。

まず問われるべきは、謡曲に先んじた和歌説話の存在である。謡曲の基盤となった物語から説き起こし、文芸作品の形成に至る伝承の系譜を訪ねた。謡曲の素材として取り入れられたものの多くは中世の古今注であり。それは『古今集』そのものから離れた文芸世界のことだった。このことを第二章で明らかにした。

つづいて中世における救いのありかを仏教文献のなかに探った。ここでは地獄に堕ちた者の救いの可能性、むしろ救いのなさも問われねばならない。そこで第三章では、中世において賤民視された狩猟者の救済のありようを鎌倉新仏教の宗祖らの言説に求めた。

類似の主題をあつかった謡曲作品とのつながりや先後関係も重要な課題である。ここでは、作品の構想と詞章のいずれにおいても『善知鳥』が観阿弥の『求塚』に多くを負ったことを明らかにした。同様に、謡曲の背景にある仏教的な語彙も、仏教経典それ自体ではなく『往生要集』のような抄物にもとづいている。さらに言えば、読まれた抄物よりも歌われた講式の方が直接の素材になり得たのである。このことを第四章で考究した。

本稿後編(本号)では、はじめに近世の学芸において説話が継承され、徐々に変容していく様相を編年的にたどった。本来は文芸世界の伝承であったものが、説話の普及と並行して、鳥そのもののへの関心が昂じていく。北方の地でうとうが捕獲され、その姿かたちや生態が知られるようになる。かたや、うとうの名に関する語源探求がさまざまに試みられた。このことを第五章で概観した。

博物学的な関心が高まりを見せた時代の潮流に背を向けるかのように、文芸世界への沈潜を深めた文人がいた。菅真澄は日本民俗学の先駆者として、今や柳田國男をしのぐほどの研究は盛況だが、うとうについて彼が追求し続けた事実はいままであまり問題視されていない。

い。残された多くの著述に即し、その足取りを第六章で追った。

真澄の半生におよぶ旅の動機を探っていくと、うとう伝承のかかわりが深刻な契機として浮上する。それは真澄の龐大な著述のなかに、断片的ではあるが切実な思いとして刻まれていた。第七章では、うとうの伝承を追いつづけ、ついに放擲するしかなかったひとりの文人の足跡をたどることで、北のはずれの海鳥の物語が人々を魅了し続けてきた悲哀の根源に迫ることをめざした。

謡曲の背景にある伝承にまでさかのぼって、その重層的な成り立ちを理解するには、文学史・芸能史からの考察だけでなく、宗教史・民俗史にまたがる領域からのアプローチも必要となろう。これはもちろん理想であって、遠大な目標ではないが、そこに一歩でも近づきたいと考えた。そうした意識のもと、物語の背後にひそむ民間信仰と仏教の融合した実態を積極的に評価していく視座に立つて、うとう伝承の根源に関する探求と文芸作品の生成過程の解明を本稿において試みたのである。

注

(1) 関山和夫『説教の歴史的研究』法藏館、一九七三年、四〇四頁。同『説教の歴史―仏教と語芸』白水社、一九九二年、一五五頁。

(2) 『さんせい太夫』天下一説経与七郎正本、信多純一・阪口弘之校注『古浄瑠璃 説経集』新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九年、三三二頁。

- (3) 室本弥太郎『説経集』新潮日本古典集成、一九七七年、三九七頁。
- (4) 近松門左衛門『夕霧阿波鳴渡』山根為雄他校注『近松門左衛門集』1、新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年、四三四頁。
- (5) 磯田道治『竹斎』前田金五郎・森田武校注『仮名草子集』日本古典文学大系、岩波書店、一九六五年、九八頁。
- (6) 井原西鶴『一目玉鈴』新編西鶴全集編集委員会『新編西鶴全集』第五卷下、勉誠出版、二〇〇七年、一二七〇頁。
- (7) 喜多村校尉編、相坂則武・伊藤祐則補『津軽一統志』『首巻目録』新編青森県叢書刊行会編『新編青森県叢書』第一巻、歴史図書社、一九七四年、四頁。
- (8) 『吾妻鏡』新訂増補国史大系第三二二巻、吉川弘文館、一九三二年、三七二頁。
- (9) 『津軽一統志』『首巻 名所』前掲書、一二頁。
- (10) 錦仁『なぜ和歌を詠むのか―菅江真澄の旅と地誌』笠間書院、二〇一一年、三一五頁。
- (11) 『当代記』巻四、早川純三郎編『史籍雑纂第二』国書刊行会、一九一一年、一〇六頁。
- (12) 宝井其角『類柑子』中巻、渡辺ユリ子『其角「類柑子」』新水社、二〇一二年、二六二頁。
- (13) 『奥羽観迹聞老志』巻三「唐貢土産類上」仙台叢書第十五巻、仙台叢書刊行会、一九二八年、六七頁。
- (14) 『謡曲拾葉抄』國學院大学出版部、一九〇九年、七一〇頁。
- (15) 伊勢貞丈『安斎隨筆』巻之二十九、故実叢書編輯部編『安斎隨筆第二』改訂増補故実叢書九巻、明治図書出版、一九九三年、二四六頁。
- (16) 松前広長『松前志』巻四「禽獸部」寺沢一他編『蝦夷志・蝦夷隨筆・松前志』北方未公開古文書集成第一巻、叢文社、一九七九年、一四八頁。
- (17) 古川古松軒『東遊雜記』柳田國男校訂『紀行文集』帝国文庫第二十二巻、博文館、一九三〇年、五一八―五一九頁。
- (18) 曲亭馬琴『烹雜記』前集上之巻「多湊ぶり」日本隨筆大成編輯部編『日本隨筆大成』第一期二一、吉川弘文館、一九七六年、四三五―四三八頁。
- (19) 新村出『蝦夷に関する古歌』『新村出全集』第一巻、筑摩書房、一九七二年、八九頁。服部四郎編『アイヌ語分類辞典』岩波書店、一九六四年、五、一八二頁。知里真志保『分類アイヌ語辞典 人間編』知里真志保著作集別巻Ⅱ、平凡社、一九七五年、三二六頁。
- (20) 小山田与清『松屋筆記』巻七十、国書刊行会、一九〇八年、五六―五七頁。
- (21) 同書、五七頁。
- (22) 屋代弘賢『不忍禽譜』国立国会図書館本 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286932>) 第六葉。
- (23) 西沢敬秀『善知鳥考』本編上之巻「安方の事」新編青森県叢書刊行会編『新編青森県叢書』第一巻、歴史図書社、一九七四年、四三五頁。
- (24) 同書、本編下之巻「烏頭鳥名義の事」四四二―四四四頁。
- (25) 同書、本編下之巻「宇多布爾填而在字義廻事」四四六―四四七頁。
- (26) 『そとがはまかせ』菅江真澄全集第一巻、未來社、一九七一年、二八七頁。
- (27) 内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記』1、平凡社、一九六五年、一七五頁。
- (28) 『そとがはまかせ』前掲書、二八七―二八八頁。
- (29) 三溝政員『政員の日記』新編信濃史料叢書第十巻、信濃史料刊行会、一九七四年、三二七頁。
- (30) 従来の民俗学からの視点に対し、国文学や歴史学の視点から真澄の読み直しが必要とされる。このことを以下の研究から学んだ。佐伯和香子『菅江真澄の旅と和歌伝承』岩田書院、二〇〇九年。志立正知『歴史』を創った秋田藩―モノガタリが生まれるメカニズム』笠間書院、二〇〇九年。錦仁『なぜ和歌を詠むのか』前掲書、

- 二〇一一年。細川純子『菅江真澄の文芸生活』おうふう、二〇一四年。
- (31) 『そとがはまづたい』菅江真澄全集第一卷、四五六頁。
藤原家隆『壬二集』新編国歌大観第三卷、私家集編Ⅰ、角川書店、一九八五年、七七九頁、二二六八番。
- (32) 錦仁『なぜ和歌を詠むのか』前掲書、七一頁。
- (33) 『えみしのへさき』菅江真澄全集第二卷、一五頁。
- (34) 『まきのふゆがれ』菅江真澄全集第二卷、二九一頁。
- (35) 『そとがはまづたい』前掲書、四五九頁。
- (36) 同書、四六〇頁。
- (37) 『すわのうみ』菅江真澄全集第一卷、一二六頁。
- (38) 『つがろのおち』菅江真澄全集第三卷、二二九頁。
- (39) 『そとがはまづたい』前掲書、四六〇～四六一頁。
- (40) 内田武志『菅江真澄研究』菅江真澄全集別巻一、一九七七年、四四一頁。
- (41) 『みずのおもかげ』菅江真澄全集第十卷、三四八頁。
- (42) 内田武志『うとう考』菅江真澄全集第十二卷、五〇八頁。
- (43) 後藤宙外「真澄翁の善知鳥考(上)(二)」「(五)」「秋田魁新報」一九三八年一月二二～一八日(筆者未見)。再録「うとう考」前掲書、五〇九～五一〇頁。
- (44) 『うとう考』菅江真澄全集第十二卷、五〇九頁。
- (45) 同書、五〇九頁。
- (46) 同書、五〇九頁。
- (47) 『そとがはまづたい』前掲書、四五九～四六〇頁。
- (48) 内田武志『うとう考』前掲書、五〇五頁。
- (49) 同書、五〇九～五一〇頁。
- (50) 同書、五一〇頁。
- (51) 『かせのおちは』六「雪ノ出羽路雄勝郡条九郷」菅江真澄全集第十一卷、二二二頁。
- (52) 内田武志「解題」菅江真澄全集第十一卷、五三二頁。
- (53) 『しのはぐさ』菅江真澄全集第十卷、三三二頁。
- (54) 『しのはぐさ断簡』菅江真澄全集第十二卷、一四一頁。
- (55) 『ふでのまにまに』卷五、菅江真澄全集第十卷、一二八頁。
- (56) 『雪の出羽路平鹿郡』菅江真澄全集第六卷、一九〇頁。
- (57) 『月の出羽路仙北郡』菅江真澄全集第八卷、一二五頁。
- (58) 『玉勝間』六の巻、本居宣長全集第一卷、筑摩書房、一九六八年、二〇一頁。
- (59) 菊池勇夫「菅江真澄の著作と学問について」『真澄学』四号、二〇〇八年、一三八頁。
- (60) 『くばたのおちば』「あまたてのゆゑよし」菅江真澄全集第十卷、四二〇頁。
- (61) 『真澄墓碑銘』柳田國男『菅江真澄』創元社、一九四二年。再録、柳田國男全集第十二卷、一九九八年、五七一頁。
- (62) 『粉本稿』「序文」菅江真澄全集第九卷、一九七三年、一三頁。
- (63) 『はしわのわかば』菅江真澄全集第一卷、三八三頁。
- (64) 野村純一「菅江真澄の方法——童物語」をめぐって」『昔話伝説研究の展開』三弥井書店、一九九五年、七頁。
- (65) 『いなななかみち』菅江真澄全集第一卷、四〇頁。
- (66) 『えぞのてぶり続』菅江真澄全集第二卷、一五七頁。
- (67) 『おくのうらうら』菅江真澄全集第二卷、三四六頁。
- (68) 同書、三四六～三四七頁。
- (69) 細川純子『菅江真澄のいる風景』みちのく書房、二〇〇八年、一八〇頁。
- (70) 『くめじのはし』菅江真澄全集第一卷、一五三頁。
- (71) 『まきのあさつゆ』菅江真澄全集第二卷、三八一頁。
- (72) 『おくのてぶり』菅江真澄全集第二卷、四五一頁。
- (73) 『つがろのおく』菅江真澄全集第三卷、五九頁。
- (74) 内田武志『うとう考』菅江真澄全集第十二卷、五〇七頁。

- (75) 真崎勇助『酔月堂漫録』巻十五、菅江真澄全集別巻一、一九七七年、一八頁。
- (76) 竹村治左衛門『伊頭園茶話』菅江真澄全集別巻一、一三頁。
- (77) 内田武志『菅江真澄研究』前掲書、一頁。
- (78) 中村幸彦「菅家瑞応録について」太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』上、吉川弘文館、一九七五年。再録、中村幸彦著述集第十巻、中央公論社、一九八三年、三七二頁。
- (79) 中村幸彦「白太夫考―天神縁起外伝」『文学』四五巻八号、一九七七年。再録、中村幸彦著述集第十巻、三七八頁。
- (80) 『道明寺』伊藤正義『謡曲集』中、新潮日本古典集成、一九八六年、三九三頁。
- (81) 白井永二『菅江真澄の新研究』おうふう、二〇〇六年、二五九頁。
- (82) 菊池勇夫『菅江真澄』吉川弘文館、二〇〇七年、一一頁。
- (83) 『かせのおちは』三、菅江真澄全集第十一巻、一一〇頁。
- (84) 『菅原伝授手習鑑』第三「佐太村」景山正隆編『校注菅原伝授手習鑑』笠間書院、一九七七年、一〇四頁。
- (85) 新行和子『菅江真澄と近世岡崎の文化』桃山書房、二〇〇一年、三七頁。
- (86) 『くぼたのおちは』「あまだてのゆゑよし」前掲書、四二〇頁。
- (87) 曲亭馬琴『玄同放言』日本随筆大成第一期5、吉川弘文館、一九七五年、四三〜四七頁。「こさ」の語源に関しては、近代のアイヌ語研究において、新村出と金田一京助がともに古来の解釈を支持している。それはアイヌの「息」の語に由来するとした説であり、人間の息に呪力があると信じられていたという。「胡沙」すなわち胡地の砂塵とする橘南谿と曲亭馬琴の説、「胡筋」すなわちアイヌの笛とする菅江真澄の説はいずれも否定される。金田一京助「胡沙考」『金田一京助全集』第六巻、三省堂、一九九三年、一五七〜一五八頁。
- (88) 『ふでのまにまに』菅江真澄全集十巻、七三頁。真澄の馬琴・南谿批判に関しては以下を参照。菊池勇夫「菅江真澄の著作と学問について」前掲論文、一四三頁。
- (89) 細川純子『菅江真澄のいる風景』前掲書、三四〇頁。
- (90) 錦仁「なぜ和歌を詠むのか」前掲書、九四頁。
- (91) 『雪の出羽路平鹿郡』菅江真澄全集第六巻、一九七六年、一九〇頁。
- キーワード 善知鳥 歌枕 語源 菅江真澄 曲亭馬琴